

令和七年度 後期

博多女子高等学校

入学試験問題

国語

注 意

- 一、合図があるまでこの冊子を開かないこと。
- 一、答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 一、問題の内容に関する質問は受け付けない。
- 一、途中退出は解答作成中の他の受験生に迷惑になるので認めない。

次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。解答はすべて各問の答の欄に書き入れ、句読点等は字数として数えること。

東京の国際空港に降り立ち、素っ気ない空間を入国審査所に向かって歩きはじめる時、きまって感じることもある。空間は面白みがなく無機質だが、なんと素晴らしく掃除の行き届いた場所だろうか。床のタイルはどこもピカピカで、床の上で転げ回ってもさして服は汚れないのではないかと思うほど。カーペットをしきつめた床も清潔だ。仮にシミがあっても、それを除去しようと最善の努力をはらった痕跡がある。おそらく掃除をする人は、仕事の終了時間が来ても、モップや掃除機をさっさと片付けたりしないで、切りのいいところまで仕事をやりおおせて帰るに違いない。この丁寧さが、他国から帰ってくると切実に感じられる。空港を出てクルマで高速道路を走りはじめてもこの感覚は持続する。田園風景を切り裂いて進む景観に高揚感はないが、路面は鏡のように滑らかで、クルマのエンジン音もきわめて静かだ。道路に沿って点灯する街路灯も、どれひとつとして消えていたりはない。

その感慨はやがて都心部の夜景に吸い込まれていく。東京に近づくにつれ、夜景の緻密さに感覚が引き締まってくるようだ。ひとつひとつのどの灯りも、しっかりと確かに点灯しており、切れたり明滅したりはしていない。そんな灯りが集合して高層ビルとなり、果てしない奥行きの中に連なって夥しい光の堆積をなす。

今の東京の夜景は、世界で一番美しいかもしれない。そういう感想を漏らすと、異論を唱える人は少なからずいる。夜景はやっぱりんバイですよとか、香港のヴィクトリアピークから見下ろす夜景にはかなわないなどと、うるさ方の意見は百出するけれども、同意してくれる人は案外と少ない。やはり、思い過ごしかもしれないと思いはじめていた矢先、都市をテーマとしたテレビのドキュメンタリー番組で、世界の空を飛び回るパイロットたちの言葉が紹介されていた。

「いま、上空から眺めて一番きれいな夜景は東京」

世界の夜景を機上から眺め続けている人々の意見だけに説得力がある。まさに我が意を得た思いがした。世界広しといえども、東京ほど広大な広がりを持つ都市はないし、信頼感あるひとつひとつの灯りがそういう規模で結集しているわけである。このあたりに僕はひとつの確信を持つ。

掃除をする人も、工事をする人も、料理をする人も、灯りを管理する人も、すべて丁寧に篤実に仕事をしている。あえて言葉にするなら「繊細」「丁寧」「緻密」「簡潔」。そんな価値観が根底にある。日本とはそういう国である。

② これは海外では簡単に手に入らない価値観である。パリでも、ミラノでも、ロンドンでも、たとえば展覧会の会場ひとつ日本並みの完成度で作ろうとするなら、その骨折りは並大抵ではない。基本的に何かをよりよく丁寧^{ていねい}にやろうという意識が希薄^{薄い}である。労働者は時間がくれば作業をやめる。効率や品質を向上させようという意欲よりもマイペースを貫く個の尊厳が仕事に優先するとでも言うか。それを前提に、管理する側がほどよく制御して仕事を進めていく。確かに、ヨーロッパには職人氣質というものが存在するが、日常の掃除や、展示会場の設営などは、職人氣質の及ぶ範囲ではないのかもしれない。さらに言えば、こうした普通の環境を丁寧にしつらえる意識は作業をしている当人たちの問題のみならず、その環境を共有する一般の人々の意識のレベルにも繋が^{つな}っているような気がする。特別な職人の領域だけに高邁^{こうまい}な意識を持ち込むのではなく、ありふれた日常空間の始末をきちんとすることや、それをひとつの常識として社会全体で暗黙^{あんもく}裡に共有すること。美意識とはそのような文化のありようではないか。

③ ものづくりに必要な資源とはまさにこの「美意識」ではないかと僕は最近思いはじめている。これは決して比喻やたとえではない。ものの作り手にも、生み出されたものを喜ぶ受け手にも共有される感受性があつてこそ、ものはその文化の中で育まれ成長する。まさに美意識こそものづくりを継続していくための不断の資源である。しかし一般的にはそう思われていない。資源といえば、まずは物質的な天然資源のことを指す。

④ 日本は天然資源に恵まれないので、工業製品を生み出すために高度な「技術」を磨いてきたと言われる。戦後の高度経済成長は、そのような構図でもものづくりを進めてきた成果である。世界はそう認識しているし、日本人もそう思ってきた。戦後の日本が得意とした工業生産は「規格大量生産」、つまり均一にたくさん製品を作ることをきわめて安定した水準で達成することであった。また、製品を小型化する凝縮力のようなものがそこに働いて、日本の工業製品の優位をより鮮明に示すことに成功した。日本の生産技術は、量を前提とした品質と、緻密さや凝縮性を工業製品として体现した結果、世界からの高い信用を獲得したのだ。

しかしながら、ここで言う「技術」とは、言い換えれば繊細、丁寧、緻密、簡潔にものづくりを遂行することであり、それは感覚資源が適切に作用した結果、獲得できた技の洗練ではないか。つまり、今日において空港の床が清潔に磨きあげられていたり、都市の夜景をなす灯りのひとつひとつが確実に光を放つことの背景にある同じ感受性が、規格大量生産においても働いていたのではないかと考えられる。高度な生産技術やハイテクノロジーを走らせる技術の、まさに先端を作る資源が美意識であるという根拠はここにある。

日本は石油や鉄鉱石のような天然資源に乏しい。これは事実で、この事実が歴史の重要な局面でこの国の方針に大きく影響し、第二次大戦に日本が歩みを進めてしまった要因のひとつもここにある。しかし、今日においては、天然資源の確保に汲々としてきたことがむしろプラスに転じは始めている。もしも日本に石油が豊富に湧き出ていたら、おそらくは環境や省エネルギーに対する意識は今日ほどには高まっていなかったはずだ。周囲を海に囲まれ、その大半が山であるという恵まれた自然も、湧き出る石油や排ガスなどによって後戻りできないほどにぼろぼろに汚染されていたかもしれないし、地球温暖化をもたらす温室効果ガスの排出量規制について、京都で国際会議を主宰する主体性も持ち得ていなかっただろう。むしろ、日本の石油消費や二酸化炭素の排出を抑制すべく、中国やアメリカが必死で説得するような事態を迎えていたかもしれない。マネーという富はもつと巨大にこの国に蓄えられ、医療も、教育も、通信も、全て無料で国が提供するような裕福な国になっていたかもしれないが、その豊かさは、やがて訪れる次の時代に対応することができず、悲惨なすいたいを運命づけられていたかもしれない。

⑤ 幸いなことに、日本には天然資源がない。そしてこの国を繁栄させてきた資源は別のところにある。それは繊細、丁寧、緻密、簡潔にもはや環境をしつらえる知恵と感性である。天然資源は今日、その流動性が保障されている世界においては買うことができる。オーストラリアのアルミニウムも、ロシアの石油も、お金を払えば買えるのだ。しかし文化の根底で育まれてきた感覚資源はお金で買うことはできない。求められても輸出できない価値なのである。

冷静に見ると、日本の工業製品は、つましさやエネルギー消費の視点、そして使用者の成熟にともなう製品の洗練という点で、すでに優位性を発揮しは始めている。世界同時不況のせいですこし見えにくくなってはいるが、日本の自動車メーカーがひととき世界一の販売台数を記録したのもその一端である。生活者の意識も、省エネルギーや環境に対する負荷の軽さを前向きに受けとめるようになり、暮らしの、目に見えない中心に、過剰を避け、節度をわきまえていく志向や理性をひそやかに宿らせているのである。

⑥ 今日、僕たちは、自らの文化が世界に貢献できる点を、感覚資源からあらためて見つめ直してみてもどうだろうか。そうすることで、これから世界が必要とするはずの、つましさや合理性をバランスよく表現できる国としての自意識をたずさえて、未来に向かうことができる。

生産技術は現在、アジア全域、そして世界全域に等しく広がっていく時代を迎えている。自国におけるものづくりの空洞化を憂いている暇はない。ものの生産においては、量よりも質へと、はつきりと重心をシフトしていくことを考えなくてはならない。さらに

は、工業生産と同時に、恵まれた自然環境にも目を向け、サービスやホスピタリティの局面にも資源としての美意識を振り向けていくことが重要である。そうすることで、自然をハイテクノロジーと感性の両面から運用できる、新しいタイプの環境立国として日本はその存在を示していくことができると思うのだ。石油は産しないが、温泉はいたるところに湧き出ている。住まいやオフィスの環境も、モビリティや通信文化の洗練も、医療や^eふくしの細やかさも、ホテルやリゾートの快適さも、美意識を資源とすることで、僕らは経済文化の新しいステージに立つことができるはずだ。

中国、そしてインドの台頭はもはや前提として受け入れよう。アジアの時代なのだ。僕は高度成長の頃より、いつしかGDPを誇りに思うようになっていたが、そろそろ、その呪縛から逃れる時が来たようだ。GDPは人口の多い国に譲り渡し、日本は現代生活において、さらにそのずっと先を見つめたい。アジアの東の端というクールな位置から、異文化との濃密な接触や^{あつれき}軋轢を経た後のみ到達できる極まった洗練をめざさなくてはならない。

技術も生活も芸術も、その成長点の先端には、微細に打ち震えながら、世界や未来を繊細に感知していく感受性が機能している。そこに目をこらすのだ。世界は美意識で競い合ってこそ豊かになる。

(原研哉『日本のデザイン』による。一部改変)

(注)

夥しい…数量が非常に多い

ムンバイ…インドの都市名

うるさ方…何にでも文句をつけたがる人

百出…次々にたくさん出ること

篤実…人情に厚く誠実なこと

骨折り…苦勞すること

高邁…志などが高く、すぐれていること

暗黙裡…黙っていて何も言わない条件のもと 不断…絶え間なく続くこと

汲々…一つのことにとらわれて、ゆとりなくそれだけにとめるさま

節度…ゆきすぎのない、ちょうどよい程度

憂いて…つらいと思つて

ホスピタリティ…心のこもったもてなし

モビリティ…職業、居住、社会的地位などの移動性

GDP…国内総生産。国の経済力を計る物差しの一つ

軋轢…仲が悪くなること

問一 本文中の しき すいたい ふくし に適切な漢字をあて、楷書で書きなさい。また、希薄^b 凝縮^c の――線を施した漢字の読みを、平仮名で書きなさい。

問二 本文中に 信頼感^①あるひとつひとつの灯りとあるが、「信頼感(が)ある」とは、「ひとつひとつの灯り」がどのような状態にあると言うのか。最も適当な三十字の部分を、本文中からそのまま抜き出し、その初めと終わりの三字ずつを書きなさい。

問三 本文中に これは海外では簡単に手に入らない価値観である とあるが、仕事をする上で、海外、特にヨーロッパで優先されることは、何か。最も適当な十二字の部分を、本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問四 本文中に ものづくりに必要な資源 とあるが、日本を繁栄させてきた「資源」とは、何か。最も適当な二十八字の部分を、本文中からそのまま抜き出し、その初めと終わりの三字ずつを書きなさい。

問五 本文中に 工業製品を生み出すために高度な「技術」を磨いてきた とあるが、「工業製品を生み出すための高度な技術」とは、何か。最も適当な二十四字の部分を、本文中からそのまま抜き出し、その初めと終わりの三字ずつを書きなさい。

問六 本文中に 幸いなことに、日本には天然資源がない とあるが、もし「日本に」「天然資源が」あったとしたら、日本はどのようなになっていたと筆者は考えているか。最も適当な三十二字の部分を、本文中からそのまま抜き出し、その初めと終わりの三字ずつを書きなさい。

問七 本文中の これから世界が必要とするはずの、つつましさを合理性 とは、何か。最も適当な二十一字の部分を、本文中からそのまま抜き出しなさい。

問八 本文の内容に関して、筆者の主張に合致しない発言をしている生徒として適当なものを、次の1～5のうちから二つ選び、その番号を書きなさい。

1 Aさん… 美意識とは、ものの作り手にも、生み出されたものを喜ぶ受け手にも共有される感受性のことです。このような感受性があつてこそ、ものは、その文化の中で育まれ成長していくのですね。

2 Bさん… 確かにそうですね。美意識はものづくりを継続していくための不断の資源ですが、一般的にはそのように思われていませんよね。なぜならば、資源と言えば、物質的な天然資源を指すからです。

3 Cさん… でも、日本には多くの天然資源がないから、アルミニウムや石油などではなく、質量を認識しにくく、また、お金でも買えない太陽光といった感覚資源を活用して、この国を繁栄させたのですね。

4 Dさん… ということは、地球温暖化防止や世界各国との関係改善のために、今後の日本は、天然資源と感覚資源とを美意識で融合した新しいタイプの工業立国を目指して、重心をシフトする必要があるそうですね。

5 Eさん… 技術に限らず、生活も芸術も、その成長点の先端には、世界や未来を繊細に感知していく感受性が機能しています。世界は、美意識で競い合つてこそ豊かになっていけそうですね。

2

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。解答はすべて各問の答の欄に書き入れ、句読点等は字数として数えること。

人主^①の患は人を信ずるに在り。人を信ずればすなはち人^aに制せらる。人臣^②の其^③の君に於けるや、骨肉の親有るに非ざるなり。勢いに縛られて事へざるを得ざるなり。故に人臣^④為る者、其の君の心を窺^⑤するや須臾^cの休み無く、しかうして人主怠り傲^bりて其の上に処るは、此れ世に君を劫^⑥かし主を弑^⑦すること有るゆゑなり。

人主為りて大いに其の子を信ずれば、すなはち姦臣^⑧子^⑨に乗じて以て其の私を成すを得。故に李兌は趙王に傳きて主父を飢えしむ。人主為りて大いに其の妻を信ずれば、則ち姦臣^⑩に乘じて以て其の^⑪を成すを得。故に優施は麗姫に傳きて、申生を殺して奚齊を立つ。夫れ妻の近きと子の親しきを以てして猶ほ信ずべからざれば、すなはち其の余は信ずべき者無し。

〔荀子・韓非子〕「韓非子」による。一部改変

(注)

人主…君主 骨肉の親…肉親同士の親愛の情 非ざるなり…あるわけではない 勢い…君主の権力と勢い

事へ…仕え 窺^す…隙^{すき}をうかがうこと 須臾…わずかな時間 しかうして…それなのに

其の上に処る…臣下の上位にあぐらをかいている 劫かし…脅迫したり 弑する…殺す ゆゑ…理由

人主為りて…君主でありながら 姦臣…邪悪な臣下 私…私的な野心 李兌…昔の中国にあった「趙」の国の人

趙王…「趙」の国の恵文王（国王の名） 傳きて…取り入って 主父…「趙」の国の恵文王の父

飢えしむ…飢え死にさせた 優施…昔の中国にあった「晋」の国の猷公（国王の名）に仕えた芸人 麗姫…猷公に愛された女性

申生…別の女性が産んだ猷公の子ども 奚齊…麗姫の産んだ子ども 余…そのほか

問一 本文中のすなはち^a しかうして^b ゆゑん^c を、それぞれすべて現代仮名遣いに直して、平仮名で書きなさい。

問二 本文中に患^①とあるが、その意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- | | | | | | |
|---|-----------|---|----------|---|-------|
| 1 | 大事なところ | 2 | おもしろいところ | 3 | 悪いところ |
| 4 | かわいそうなところ | 5 | 良いところ | | |

問三 本文中に事へ^②とあるが、その主語として最も適当な漢字二字を、本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問四 本文中の故に^③人臣^④為る者^⑤という書き下し文の読み方になるように、解答欄の漢文の最も適当な箇所を、返り点を付けなさい。

故^ニ為^ル 人 臣 者

問五 本文中に姦臣^④子^⑤とあるが、ここで例として挙げられている最も適当な人物名を、それぞれ本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問六 本文中の空欄 ☐X☐Y に入る漢字一字の組み合わせとして最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- | | | | | | |
|---|-------------------------------|---|-------------------------------|---|-------------------------------|
| 1 | ☐ X 子・ | 2 | ☐ X 妻・ | 3 | ☐ X 子・ |
| 4 | ☐ X 妻・ | | | | ☐ Y 私 |
| | ☐ Y 私 | 5 | ☐ X 子・ | | |
| | | | ☐ Y 妻 | | |

問七 本文中に 信⑥ずべからざれば とあるが、その意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 信用することができないとすれば
- 2 信頼する意味があつたとしても
- 3 信頼するに十分であるとすれば
- 4 信用する相手がいたとしても
- 5 信頼するものがたくさんあるので

3

次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。解答はすべて各問の答の欄に書き入れ、句読点等は字数として数えること。

来るぞ。

隣から聞こえた呟つぶやき。肩を叩たたかれ、眞家春馬は頭から被かぶつていたウインドブレーカーを静かに剥はいだ。一月の冷たい空気が口や鼻から体内へ入り込んでくる。冷気が体を貫き、余分な熱を逃がしていく。

「そろそろだ」

隣に佇たたずんでいた緒方先輩が、遠くに視線をやりながら呟おがたいた。

京急本線の鶴見市場駅にほど近い鶴見中継所は、住宅地や商店街にほど近いところにある。普段はもつと静かな場所なのだろうけれど、今日は違う。

一月の二日と三日。箱根駅伝の行われるこの二日間、一区から二区へ襷たすきをリレーするこの場所は多くの観戦客でこった返す。国道十五号線を跨またぐ歩道橋には「第九十二回東京箱根間往復大学駅伝競走」というおうだん幕が掲げられ、沿道には観戦客があふれている。

深呼吸をすると、真つ白な息が視界を被^{おお}つた。その向こうに幟^{のぼり}が見える。中継所の前後百メートルは幟の設置が禁止されているけれど、そこから外れた場所にえんじ色、紺色、藤色、ピンク色、赤、青、黄色、緑……色とりどりの幟がある。たくさんの大学の名前が書かれた幟は、風になびいてばさばさと揺れる。観客の振る小旗の音に声援が混ざって、まるで大きな生き物の息づかいのようだった。

「眞家、頼んだぞ」

春馬が被っていたウインドブレーカーを預かった付き添い役の緒方先輩がもう一度、先程よりも強く肩を叩いてきた。四年生の彼は二、三年と箱根駅伝を走ったけれど、最後の箱根となる今年は出走者選ばれなかった。

「わかってますよ」

そう短く答えて、春馬はゆっくりと立ち上がった。その場で軽く足踏みとジャンプを繰り返す。体を撫^なでる空気がより一層冷たくなつた気がした。

まるで駅伝の襷リレーをするために作られたかのような側道では、揃^{そろ}いの防寒着を身につけたスタッフが無人の中継地点から国道十五号線を睨^{にら}みつける。その視線の先は東京だ。大手町^{おおてまち}をスタートし、一本の襷を運ぶ男達がこの場所へやってくるのを、今か今かと待ち構えている。

スタッフの一人が、春馬の所属する大学の名前を呼んだ。藤澤大学^{ふじさわ}、という寒さをものともしない大声に釣られるように、春馬は大きく返事をした。小走りで側道に出ると、観客の誰かに名前を呼ばれた。

眞家、頑張れ、眞家。

藤澤、藤澤。

勝て、藤澤。

③ コースの先に、一区のランナーの姿が見えた。本道から逸^それて側道へ入り、その姿が大きくなっていくごとに、声援は歓声になる。誰かの名前でも応援の言葉でもなくなり、「わー」とか「おー」といった熱っぽい雄叫^{おたけ}びになる。男も女も関係なく、子供も大人も年寄りも関係なく、熱狂する。

ああ、そうだ。これが箱根駅伝だ。今年で三度目の経験なのに、改めて春馬はそう思った。たかだか大学生の駅伝なのに、関東学

生陸上競技連盟に加盟している大学しか出場しないローカル大会なのに。でも、そんなにくつなど関係なく、正月のただ中にある人々を夢中にさせる。新年を迎えた喜びや清々しさが、小旗にのせられ空高く舞い上がる。

藤澤大学の一区のランナーに遅れること十メートル、二人のランナーが走ってくる。運営スタッフが追加で違う大学の名前を呼んだ。日本農業大学、英和学院大学。ほぼ同時に二人の男が返事をして、駆け足で側道に出てきた。

鮮やかなえんじ色のユニフォームをまとった英和学院大学の助川亮介と、純白と深緑色のユニフォームを着た日本農業大学の藤宮藤一郎。七色の光の線が走るスポーツ用のサングラスをかけた助川の表情はほとんど読み取れない。サングラスをかけていなかったところで、彼はあまり感情を顔に出してくれない人間だから意味がなさそうだ。一方の藤宮はどこか硬い表情をしていた。唇を

X に結び、春馬の顔も助川の顔も見ることなくゆっくり中継ラインの上に立った。

「お久しぶりつす、助川先輩」

試しに、助川に声をかけてみた。藤宮を挟む形で並んだ助川は、ちらりとこちらを見たけれど特に何も答えなかった。

「最後だからって花持たせてあげたりしませんから」

構わず、春馬は続けた。

「あ、それは藤宮さんも一緒ですからね」

隣に立つ藤宮の顔を覗き込んでそう言うのと、「お前からの花なんているかよ」と助川が遅いリアクションを見せた。

「俺もだな」

藤宮も頷いて肩を竦める。「そんなこととしてみる、走り終えた瞬間、お前の兄貴にぶつ飛ばされるぞ」と。

そこからは、誰も口を利かなかった。

第九十二回東京箱根間往復大学駅伝競走。一月二日の往路は、青空のもとスタートした。それからおよそ一時間。一区ももうすぐ終わろうとしている。各大学の選手が互いに牽制し合い、大方の予想通りスローペースのスタートとなった一区は、全三十一・三五キロ中、十七キロ過ぎまで、ずっと団子状態が続いた。

ラスト三キロ。六郷橋の下りに入った瞬間、三人の選手が集団から飛び出した。過去には七年連続の総合優勝を誇り、今年は三年ぶりの総合優勝を狙う藤澤大学。昨年の覇者、英和学院大学。昨年、一昨年と五位に終わっている日本農業大学。抜きつ抜かれつの

攻防は三キロ続き、最後の最後に藤澤大学の一区のランナー、長谷川が前に出た。英和学院大学と日本農業大学の選手は、十メートルほど離れて藤澤大学を追った。

右手を大きく振って、春馬は長谷川の名前を呼んだ。

「はせがわあー ラスト、ラストー」

襷を肩から外し手に持った長谷川は、少しだけ目元を苦しそうに歪めながら最後の最後にまたスピードを上げた。両手に持った襷を、前に差し出す。

スタートの体勢になり、春馬は長谷川から襷を受け取った。今年の箱根駅伝の、最初の襷リレーは藤澤大学のものとなった。

握り締めた拳の中に確かな襷の手触りを感じつつ、春馬は走り出した。二十一・三五キロを走り抜いた襷は、汗で湿っていた。これが一人分、二人分と積み重なり、襷は少しずつ重くなっていく。走りたくても走れない選手、監督、コーチ、マネージャー、親、友人、恩師。数え切れないほどの人の思いが込もっていることを知っているから、自分達はこの一枚の布切れを、死んでも途切れさせたくないと思う。

もはや藤宮や助川には目もくれず、春馬は前だけを見た。二人とは十メートルほど差があるだろうが、二十三・一四キロある二区のコースの中にはないも同然だ。

今日は、日中の気温が三月中旬並みになるという予報だった。暑いレースになりそう。強風ではないものの、向かい風の中でレースが続くだろう。空気もかんそうしている。スタート前に水分補給はしっかりしたが、途中の給水も重要なポイントになる。

ひとまずは後ろの二人に注意を払いつつ、できる限りの差を作って三区の走者へ襷を繋ぎたい。けれど、それだけでは駄目だ。三区、四区、五区。そして明日の復路。レースの流れを俺がここで作る。藤澤大学の総合優勝を、俺が引き寄せる。エース区間である花の二区を任された意味は、よく理解しているつもりだ。

分離帯の上に設置されたやぐらには、日本テレビのカメラマンが中継用の大きなカメラを構えていた。藤澤大学と、その後ろに続く二つの大学の襷リレーをしっかりと映していた。その横を通過し、襷リレーをする選手を象った箱根駅伝記念像に見送られ、側道を出る。自分の前を走る選手はいない。誰も、いない。

問一 本文中の おうだん^a りくつ^b かんそう^d に適切な漢字をあて、楷書で書きなさい。また、鮮やか^c の――線を施した漢字の読みを、平仮名で書きなさい。

問二 本文中に 眞家春馬^① とあるが、箱根駅伝の二区を任された彼の、勝利への強い思いがよくわかる最も適当な二文を、一つは十五字で、もう一つは十九字で、それぞれ本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問三 本文中に 沿道^② には観戦客があふれている とあるが、沿道での応援の様子を直喩で表現した、最も適当な二十字の部分を、本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問四 本文中に コース^③の先に、一区のランナーの姿が見えた とあるが、一区のスタートはどのようなスタートだったのか。最も適当な三十四字の部分を、本文中からそのまま抜き出し、その初めと終わりの三字ずつを書きなさい。

問五 本文中の空欄 X には、「一直線」という意味の語句が入るが、その語句として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- | | | | | |
|-------|--------|--------|-----------------------|----------|
| 1 紅一点 | 2 真一文字 | 3 一朝一夕 | 4 一気呵成 ^{かせい} | 5 一挙手一投足 |
|-------|--------|--------|-----------------------|----------|

問六 本文中の 花^④ の意味として適当でないものを、次の1～5のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- | | | | | |
|-----|------|------|------|-----|
| 1 功 | 2 名誉 | 3 手柄 | 4 勝ち | 5 愛 |
|-----|------|------|------|-----|

問七 本文中に、^⑤襷は少しずつ重くなっていく
文中からそのまま抜き出して書きなさい。

とあるが、それはなぜか。解答欄の「から」に続く最も適当な二十字の部分を、本